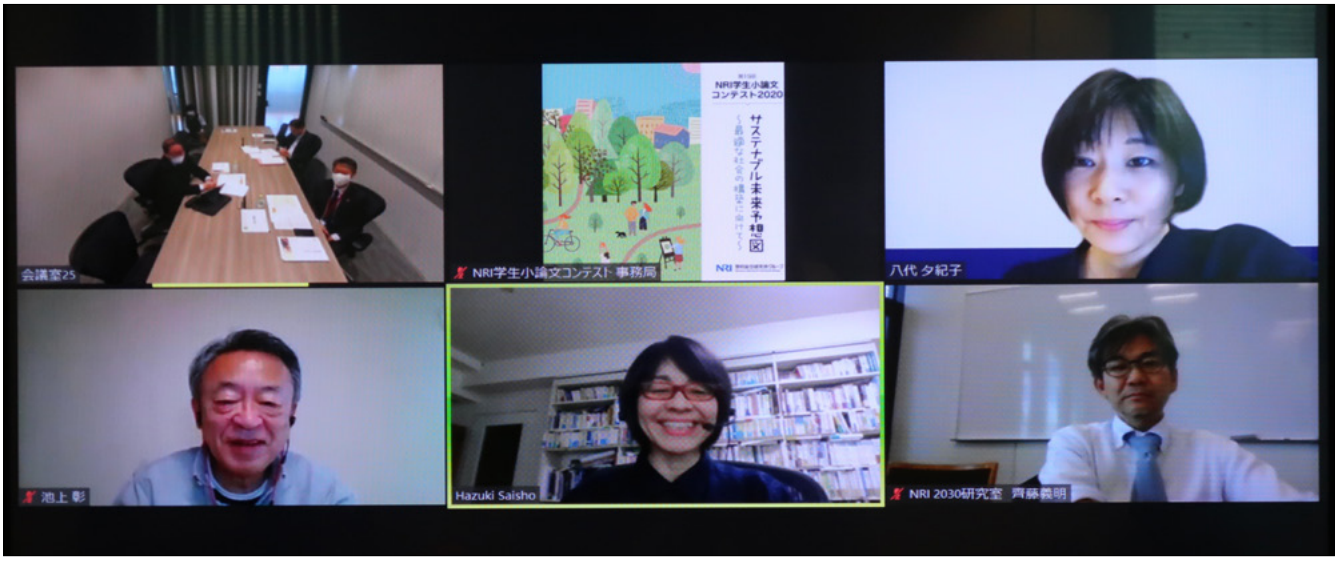
各審査委員の評価をもとに議論を行い、最終審査会に進む上位入賞論文を選定しました



2020年11月20日、審査委員7人による論文審査会が行われました。
今回は新型コロナウイルス感染対策のため、初めてのオンライン開催となりました。長時間の議論を経て、上位入賞論文8作品（大学生の部4、高校生の部4）を選定しました。各賞については、2020年12月18日の最終審査会におけるプレゼンテーションで確定します。

［論文審査会に至る経緯］

- 一次審査：NRIグループ社員108名が論文を評価。評価の高かった18論文（大学生の部8、高校生の部10）が二次審査へ。
- 二次審査：審査委員長でNRI研究理事の桑津浩太郎をはじめとする社内審査委員に加え、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんを含む7人の審査委員それぞれが、18論文を評価・採点。

［論文審査会　審査委員］

審査委員長

桑津 浩太郎　NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授
最相 葉月　ノンフィクションライター

審査委員

齊藤 義明　未来創発センター 2030年研究室長
八代 夕紀子　プラットフォームサービス開発部　グループマネージャ
小松 康弘　コーポレートコミュニケーション部長
本田 健司　サステナビリティ推進室長

論文審査会レポート

NRI学生小論文コンテスト2020
サステナブル未来予想図
～最適な社会の構築に向けて～

2020年11月20日、「NRI学生小論文コンテスト2020」の論文審査会が行われました。今回は新型コロナウイルス感染対策のため、NRI東京本社会議室を拠点に審査委員をオンラインでつなぎ、議論を行いました。その議論の一部をレポートします。
なお、性別、学校名、学年などの応募者の情報は一切伏せられたうえで、審査は行われています。

大学生の部

自らの手で最適社会を作っていこうという主体性と切実さ、問題意識の高さ

［論文審査会　対象論文］　＊文中での呼称

- **お野菜ヒッチハイクプロジェクト ～野菜の廃棄ゼロを目指した新しい直売のカタチ～**　＊「お野菜ヒッチハイク」
- **空き地転用農園「スーパー・コンバージョン・ファーム（SCF）」の提案**　＊「空き地転用農園」
- **人と環境(自然・歴史的文化)の繋がりを維持することから生まれる新たな農業との関わり方**　＊「新たな農業」
- **持続可能な観光 ～留学生から見た「おもてなし」～**　＊「おもてなし」

上位２作品が高い評価を集め、留学生の作品も高評価

桑津――評価が高かった作品は「空き地転用農園」と「お野菜ヒッチハイク」で、次いで「おもてなし」も高くなっています。それぞれご意見をお願いします。

審査委員長　桑津 浩太郎

「お野菜ヒッチハイク」――産地廃棄に対する新しい取り組みを提示

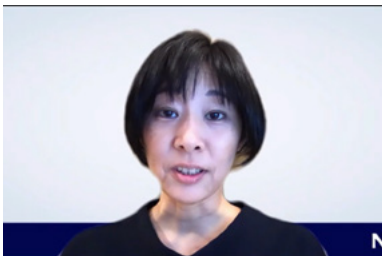
齊藤――廃棄野菜の問題の本質について、なぜ市場に出回らないのか、活用されないかを流通コストの問題に踏み込んで考察している点を高く評価しました。ヒッチハイクや最近のサブスクリプションなどの新しいアプローチを入れて、自分の頭で考えて仕組みを組み立てている点も良いと思いました。
ビジネスモデルとして成立するかどうかは詰めが必要ですが、原案としてはとても面白いと思います。

本田――産地廃棄に着目した点が非常に良いですし、価格調整で捨てられる野菜を活用するのは「最適な社会の構築に向けて」という今回のテーマにも合致しています。
特に日本は食料自給率が低く、海外から輸入する食料に伴うバーチャルウォーターの問題は世界的な問題でもあるため、世界の水問題の解決にもつながると感じました。

審査委員　本田 健司

桑津――採算性や継続性には議論があるかもしれませんが、フードロスに対して農業とITの組合せでアプローチしている点や、空いている人が車の空きスペースを使って野菜を運ぶ仕組みには、ネットワーク的な可能性も感じました。

大学生の部


審査委員　八代 夕紀子

八代――食品ロスの中でも聞きなれない産地廃棄をテーマにしているのが、面白いと思います。また、資料の使い方も上手く、図表を見ながら読むと学びが深まりました。
「課題は多いけれども、意識を変えてできることから実現しよう」と懸命に知恵を絞った様子がうかがえます。「実現すると素敵だな」と思えて、どんな工夫をすれば人を巻き込めるか、読みながら一緒に考えさせられました。
ただ、論文としては、説明不足や分かりにくい箇所が気になりました。

「空き地転用農園」――様々な社会課題を一挙に解決しようとする試み

最相――「空き地転用農園」は都市化と環境問題、人口問題を一挙に解決しようとする試みを提示しています。所有権や農業用地への転換の問題など、実現へのハードルは高いですが、都市に住む人々の生きがいにつながるという点でも、良い提案だと思います。アンケート調査を踏まえて論じている点も評価できます。

審査委員　小松 康弘

小松――様々な問題をまるごと解決しようという欲張りな内容ですが、実現の困難さも飲み込んで大きく構えた提案であると受け止めました。「サステナブル未来予想図」というテーマに大きくチャレンジしていく姿を、高く評価したいと思いました。
「空き地転用農園」の仕組みを具体的に挙げようとしていますが、お金の流れや参加主体のインセンティブなどに、不明確なところも感じました。

本田――ヒートアイランド現象問題、都市高齢者の問題、フードロスの問題などを有機的に解決しようとする考えで、「最適な社会の構築に向けて」というテーマにも合致しています。解決すべき問題点を明確化して、それに対する解決策として「空き地転用農園」という具体的な解決策を提言しています。
アンケートも実施して実現性を検証している点も、評価できると思いました。

池上――深刻なヒートアイランド現象に関して身近なところから取り組んでおり、都市部に緑が増える手法は夢があっていいなという思いから、私もこれを評価しました。

桑津――様々な課題があって実現には難しさも感じますが、意識を高めるという意味で非常に有効なテーマであり、深く検討した提案であることが察せられました。
論文としての完成度も非常に高いと思います。

「新たな農業」――農村文化と技術を守りたいという志と行動力

特別審査委員　最相 葉月さん

最相――私は「新たな農業」を最も高く評価しました。この筆者は、自ら農地を借りて農作物を育て、人と交わり、地域を活性化させようとする実践的な試みを行っています。農家のSOSを出発点として、耕作放棄地の状況や、人々の思いの深さ、参加していた学生の減少など、現実を知っていく中から、地域の文化と技術を守るシステムを構築しようとしていて、その志と行動力が、素晴らしいと思いました。
忙しい大学生がどう継続的に関与していくかなど課題はありますが、この提案にはとてもリアルなものを感じます。ぜひ最終審査会のプレゼンテーションで、筆者の発する言葉を聞いてみたいと思いました。

大学生の部

「おもてなし」──目からうろこの分析で、読み進めたくなる面白さ

特別審査委員　池上 彰さん

池上──私は「おもてなし」を最も高く評価しました。この作品は、エッセイ、読み物として大変面白く読めるということが言えると思います。
日本人自らが誇りに思っていた日本の「おもてなし」を、海外の人からは過剰で画一的と分析されたことが目からうろこで、「留学生は日本のおもてなしを最初は素晴らしいと思っていても、その中にいるとこう思うんだな」と、新鮮に受け止めました。

齊藤──日本人が誇っている「おもてなし」を、「実は行き過ぎで、サービス過剰ではないか」と問題提起している視点に惹かれ、高く評価しました。「お客様は神様」的な日本人のサービス観の欺瞞（ぎまん）を素直にえぐっていて、ドキリとさせられましたし、どんどん読み進めたくなる面白さがありました。
ただ、やはり解決策の提示については弱いと感じました。

審査委員　齊藤 義明

特別審査委員が推す２作品も最終審査へ

桑津──それでは、最終審査に進める作品について議論したいと思います。
単純に得点だけが基準にはなりませんが、傾向だけまとめますと、「空き地転用農園」と「お野菜ヒッチハイク」の評価が高くなっています。また、「おもてなし」を池上さんが1位に、「新たな農業」を最相さんが1位に推していらっしゃいます。

池上──最相さんが1位に推している「新たな農業」は、学生の参加者が減っていく状況が書かれていたので、私はこの提案の評価を高くしなかったのですが、最相さんのコメントを聞いていて、その状況にあっても筆者はよく頑張ったと言えると思いました。ですから、この作品は最終審査に進めて問題ないと思いますが、いかがでしょうか。

最相──ありがとうございます。

桑津──それでは「新たな農業」は、最終審査に進めることにしたいと思います。
池上さんが1位に推している「おもてなし」についても、同様に最終審査に進めて問題ないと思いますがいかがでしょうか。

一同──賛成です。

桑津──続いて、「空き地転用農園」と「お野菜ヒッチハイク」についてですが、得点面では「空き地転用農園」のほうがわずかに高くなっています。

池上──確か以前の審査で、上位入賞のためには1位に評価している人が少なくとも1人はいたほうが良いのではないか、という話が出たことがありますよね。「空き地転用農園」は、総合得点では最も高いものの、これを1位に評価している人はいないようです。
一方で、「お野菜ヒッチハイク」のほうは1位に評価している人が2人います。
ですから、「空き地転用農園」と「お野菜ヒッチハイク」の両方を最終審査会に進めて、ぜひプレゼンテーションで判断したいと思うのですが、いかがでしょうか。

桑津──そうですね。ぜひそれが良いと思いますが、みなさんいかがでしょうか。

大学生の部

一同――賛成です。

桑津――それでは、大学生の部の最終審査対象作品は、「空き地転用農園」「お野菜ヒッチハイク」「おもてなし」「新たな農業」の4作品といたします。
各賞は、12月18日に行われる最終審査会でのプレゼンテーション審査で決定します。

高校生の部

現実の危機を強く認識していることが うかがえる、地に足の着いた提案

［論文審査会　対象論文］　＊文中での呼称

- **Illuminateプロジェクトで子供達の未来を照らす ～サステナブルジャパンの実現へ～**　＊「イルミネイト」
- **地下鉄風力発電 ～捨てられる列車風をエネルギーに～**　＊「地下鉄風力発電」
- **「減災納税」で減災対策、そして自然災害による新たな貧困をなくす**　＊「減災納税」
- **いじめの増加について考える　～教育からの視点～**　＊「いじめの増加」

上位2作品が高い評価を集める

桑津――評価が高かった作品は、「イルミネイト」「地下鉄風力発電」「減災納税」で、次いで「いじめの増加」となっています。それぞれご意見をお願いします。

審査委員長　桑津 浩太郎

「イルミネイト」――子供の貧困に対する真摯な姿勢

最相――「イルミネイト」を最も高く評価しました。近年の最重要課題である子供の貧困、虐待、教育の機会均等などを解決に近づけようとするシステムで、現場の取材や調査に基づいて相対的貧困の構造を丁寧に考察しており、子供の貧困に対する真摯な姿勢が感じられました。
文化教育面の豊かさや親との連携にもつながる可能性もあり、子供がこのアプリをスマホに入れているだけで、ある種の「お守り」のようなパワーを持つのではないかと思いました。ぜひソーシャルビジネスとして実現してほしいです。

小松――今起こっている子供の貧困という事象が、何世代にもわたる負の連鎖を引き起こし、国を揺るがす問題になる、という大きな捉え方で発想した点を評価しました。“Illuminate”というプロジェクト名にも、高校生らしさを感じます。ただ、プロジェクトの中身については、実現性や効果などにもう少し具体性が欲しいと思いました。

特別審査委員　最相 葉月さん

八代――貧困に対して余剰分を分配するという考え方はよくありますが、この提案は負の連鎖を断つために、与えるだけでなくて成長を促す、という観点がサステナブルだと思いました。コロナ禍で現地取材が少ない中、自ら子ども食堂に足を運んで取材している点も評価できます。論文としての文章も優れていると思います。

高校生の部

本田――論文として読みやすく、コロナ禍による学校の休校状況も絡めて今を反映しているところも評価しました。アプリを使って食品ロスや貧困家庭の問題を解決するという仕組みが良く考えられており、AIの使い方を分かって書いているという印象を受けました。

審査委員　本田 健司

「地下鉄風力発電」――日常の問題意識からの斬新なアイデア

池上――私は「地下鉄風力発電」を最も高く評価しました。私たちが日常見ている光景から発想したアイデアで、実現性も感じられ、「そうか、この手があったのか」と虚を突かれました。高校生が電力量のシミュレーションを行っている点も、素晴らしいと思いました。

最相――まず、この「地下鉄風力発電」というアイデアにびっくりしました。アイデアの面白さでは、これがピカイチでした。メリット・デメリットの分析も鮮やかで、電力量の試算までしていて、非常に面白い論文だと思いました。1駅あたりの消費電力量と電気代を調べて、どのくらい賄えるかのデータもあれば、なお良かったと思います。

審査委員　八代 夕紀子

八代――地下鉄という身近なものに、このような活用の仕方があるのかと、提案の斬新さや面白さが心に響いたという点で、高く評価しました。既にどこかで取り組まれていないか調べてみましたが、同じアイデアでの実績はないようなので、これは面白い、すごいという単純な驚きがあります。電力量の試算をしている点も説得力があります。
筆者が言うように、使い捨てられているエネルギーがまだまだあるとすると、横展開の可能性も感じられました。

齊藤――地下鉄の列車風を用いた発電について論理的に追及する姿勢や、日常に問題意識を持ち、自分で考えていく姿勢を高く評価したいと思いました。
できれば、この提案でどのくらい駅構内の電力消費量カバーできるのか、それは投資に見合うのかなども、調べて欲しかったと思います。

小松――目線として身近なところから発想して、そこから論を展開している点は評価したのですが、身近さゆえに、未来予想図という切り口で見たときに、もう少し壮大さが欲しいという思いも持ちました。アイデアを述べるに留まらず、実際に試算して定量的に示そうとした点は、高く評価したいと思います。

審査委員　小松 康弘

「減災納税」――繰り返される自然災害に対する独自の切り口

桑津――「減災納税」は、ふるさと納税という既存の枠組みの応用例ですが、論文としての完成度の高さと、しっかり文献調査を行っている点を評価しました。自然災害と税を結びつけた視点や、「減災納税」というネーミングも面白いと思います。

小松――繰り返される自然災害に対するレジリエンスの強化というテーマは、サステナブルというテーマに対する直球の答えであり、アイデアの独自性を評価しました。
レジリエンスだけではなく、そのバランスにも着目し、解決方法に税という切り口を持ってきたところにセンスを感じます。
デメリットにも言及して考察を試みている点も良いと思いました。

高校生の部

池上――南海トラフ巨大地震への切迫感から生まれたアイデアですね。ふるさと納税での経験を踏まえれば、「なるほど、確かにこれなら実現可能性が感じられる」と思って、これを評価しました。

特別審査委員　池上 彰さん

八代――災害対策は地味なテーマですが、ふるさと納税にヒントを得た面白い提案です。返礼品の供給会社と業務提携するアイデアが書かれていますが、いかに減災納税としての魅力を出せるかがポイントになるでしょう。地場のSDGs推進企業と組んでマッチングギフトを用意するなど、民間企業を巻き込んで仕組みを工夫すれば実現の見込みはありそう、などと想像をかき立てられたので、その可能性を評価しました。

齊藤――私も基本的にはこれを高く評価しているのですが、ふるさと納税は税の地域間移動を財源としますが、減災納税は何から何への税移動を意図するかという点がよく分かりませんでした。もし税の純増なら国民の税負担が増えることになり、同様に「パンデミック納税」や「教育納税」などの特別納税が複数立ち上がっていく可能性があります。筆者が税構造の姿をどう考えているのか、聞いてみたいと思いました。

審査委員　齊藤 義明

「いじめの増加」――AIで子供を守るユニークな日記アプリ

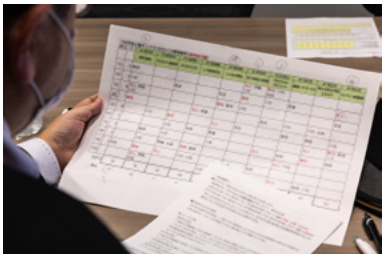
本田――日記アプリという発想に独自性があり、アプリの具体的機能がユニークで、よく練られています。また、いじめから逃れるための消極的なアプリではなく、子供たちに「気づき」や「他者への理解」を育むことを念頭に考案したという、根底にある考えも評価しました。

桑津――スマホの活用と日記という着眼点や、スマホからいじめを探るという可能性に期待を感じ、高く評価しました。ただ、生徒がスマホで日記をつけることは、簡単には習慣化しづらいのではないかという課題も感じました。

最相――昨今いじめの現場はSNSに移行していることを逆手にとり、日記アプリでいじめの異変を察知してフォローしようとする提案で、子供たちが書く日記というのは先生や親が読む前提で書かれるものだと考えれば、叩き台として良い企画だと思いました。いじめ特有のキーワードをAIで検知して、この文章は危ないというのをキャッチし、何かSOSを発信している記述があればそれをチェックする機能には、「イルミネイト」同様、ある意味でクラスの中の「お守り」になる可能性を感じました。

最終審査会でのプレゼンテーションで各賞を決定

桑津――それでは、最終審査会に進める論文をどうするかについて議論したいと思います。単純に得点だけで決めるものではないのですが、得点では「地下鉄風力発電」「イルミネイト」「減災納税」がトップ3となっていて、次いで「いじめの増加」が高くなっています。ご意見をお願いいたします。



最相――「いじめの増加」は池上さんも私も同じくらい高く評価しているので、池上さんがよろしければ、最終審査に進めて良いのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

高校生の部

池上――もちろん結構です。それから、「イルミネイト」と「地下鉄風力発電」はどちらも素晴らしい提案で、1位に評価している人が3人ずつ、2位に評価している人が1人ずつと、同じくらい高い評価を集めていますね。これは両方とも最終審査に進めることで良いと思いますが、いかがでしょうか。

桑津――確かにそうですね。「地下鉄風力発電」と「イルミネイト」を最終審査に進めることには異論はないと思います。次いで評価の高い「減災納税」も、最終審査に進めるということでよろしいですか。

一同――賛成です。

桑津――それでは、高校生の部の最終審査対象作品は、「イルミネイト」「地下鉄風力発電」「減災納税」「いじめの増加」の4作品といたします。
各賞は、12月18日に行われる最終審査会でのプレゼンテーション審査で決定します。

審査委員長

桑津 浩太郎　NRI研究理事

「サステナブル未来予想図 ～最適な社会の構築に向けて～」という今回のテーマ。多くの社会課題を抱える地球の限りある資源を有効に活用・循環させて、どのような「最適な社会」の姿やそれに向けた取り組みを描いてくれるか、期待感を持って審査にあたりました。応募論文にはコロナ禍の影響が色濃く出るのではという予想に反し、自らが大人になった時代を見据えたためか、今ある様々な社会課題を取り上げた作品が大半でした。サステナビリティというテーマに対しては、大胆な未来像を描きにくい印象を受けるとともに、取材やフィールド調査が制約されて調査分析の厚みが薄くなった傾向も見られました。

そのような中で、文章力はもちろんのこと、独自の視点や優れた考察力から問題提起や解決策の提示を行っている論文を、最終審査対象論文として選びました。

特別審査委員

池上 彰 さん　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

コロナの影響で、学生のみなさんも大変な生活を送られていると思いますので、今回はコロナ禍だからこそ、という課題設定が多いかと予想していました。しかし、そういった論文は意外と少なく、結果的に例年同様の課題が揃ったという印象を持ちました。そのため逆に、コロナ禍について言及している論文には、評価を高くしたという面もあります。

また、留学生特別賞が新設されたことは、大変良かったと感じています。コロナ禍での留学生活は大変だと推察しますが、そのような中で論文を応募された留学生には、「よく頑張った」と申し上げたいと思います。留学生が日本語で論文を書き、留学生ならではの視点を提示してくれていることに対して、改めて素晴らしいと思いました。

特別審査委員

最相 葉月 さん　ノンフィクションライター

今回はSDGsで提示されている既存の枠組みを意識しすぎているためか、既視感を覚える課題設定が多かったように思います。全体的に想像力が頭打ちになってしまったような印象で、物足りなさを感じました。少々厳しい見方かもしれませんが、全体的に論文を書く力が少し落ちているのではないか、という印象も持ちました。

それは何が原因なのか。何かしらコロナの影響が出ているのか、詳細なテーマ告知文に影響されているのか、文章力の問題なのか、よく分かりません。ともあれ、たくさんの可能性を秘めている若いみなさんには、もっともっとそれぞれの想像力を羽ばたかせて、自由な発想で課題を見つけ、斬新なアイデアを提示してほしいと思いました。

審査委員
齊藤 義明　未来創発センター　2030年研究室長

全ての論文に感じたことなのですが、自分の提案の「弱点」（デメリットや課題など）に対して、もう1回掘り下げて考察する、ということをして欲しいと思いました。「なぜ今、それができていないのか」を考えれば、必ずできていない理由が存在するはずです。弱点やできていない理由を掘り下げて考えることで、提案が進化していくでしょう。

また、行間や改行など、論文作成の基本を守っていない論文が散見されますので、その点にも気を配って欲しいと思います。

審査委員
八代 夕紀子　プラットフォームサービス開発部 グループマネージャ

高校生の作品は、論文としての文章が全般的に優秀で、稚拙だと感じるようなものはほとんどありませんでした。また、高く評価した提案は総じて調査量が多く、図表などのファクトの活用の仕方も上手いと思いました。

大学生の作品については、例年そうなのですが、斬新な提案は文章に対する評価が低くなりがちで、一方で文章を評価した論文は内容が無難な路線になってしまうというパターンが多く、どちらを優先するか悩みました。

審査委員
小松 康弘　コーポレートコミュニケーション部長

高校生の作品は、全体的に世の中で話題となっているような内容が多いという印象で、もっと自由で柔軟な発想を期待したいと思いました。時間的・空間的視野を広く持って、誰の何がサステナブルでなければならないのかということを、掘り下げて考えてほしいと思います。

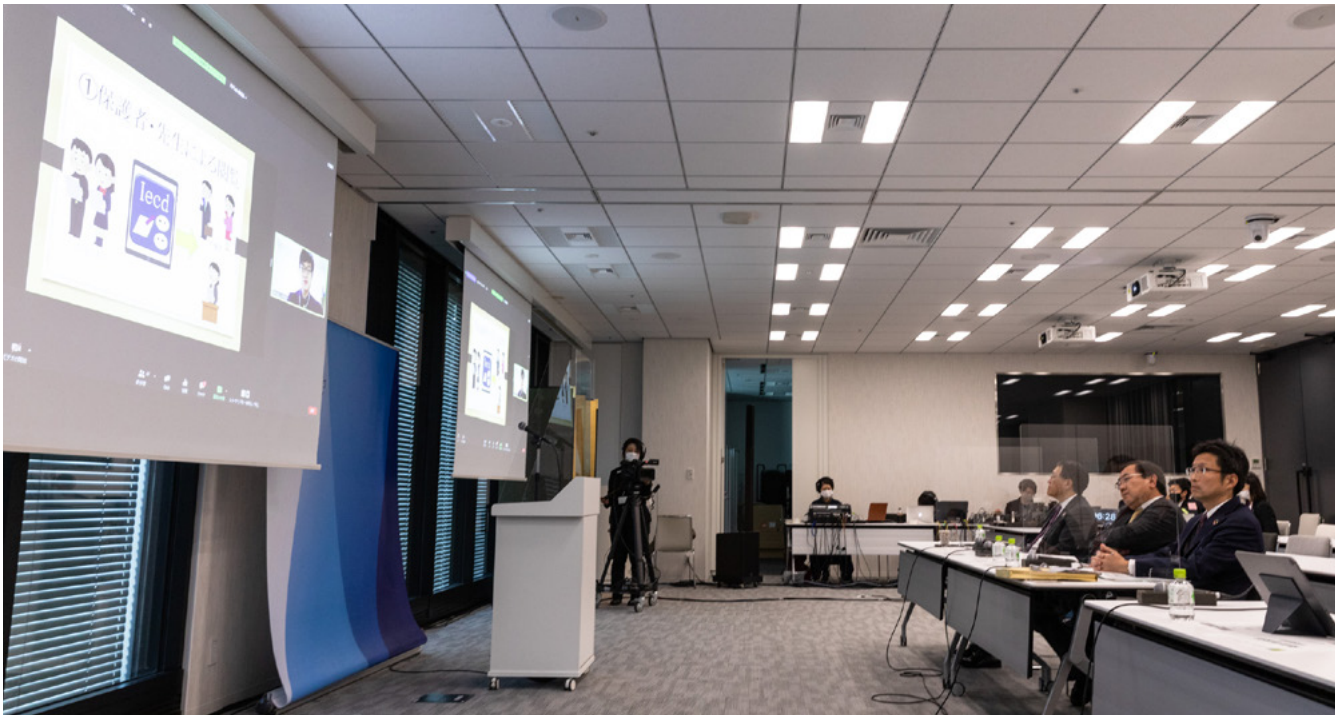
大学生の作品を評価するにあたっては、「出発点となる課題認識が差別化できていたかどうか」が、大きなポイントになったと思います。

審査委員
本田 健司　サステナビリティ推進室長

コロナ禍にも関わらず1,925もの作品を応募して頂いたことを、感謝申し上げます。また、留学生からも多くの応募いただいたことを大変嬉しく思っています。

今回の高校生の作品には、優れた提案はあったものの、もっと大胆で斬新な発想を見せて欲しいという印象を持ちました。大学生の作品には、「最適な社会の構築に向けて」というテーマからなのか、フードロスを取り上げた論文が多く、もっと広い視野からの課題発見を期待したいと思いました。

それぞれが思い描く「最適な社会」の構築に向け、「サステナブル未来予想図」をプレゼン



2020年12月18日、「NRI学生小論文コンテスト2020」の最終審査会が行われました。
例年はNRI東京本社で開催していますが、今回は新型コロナウイルス感染対策のため、NRI東京本社を拠点にオンラインでの開催となりました。
論文審査を通過した8論文（大学生の部4、高校生の部4）の執筆者がリモートで参加し、プレゼンテーション審査に臨みました。
審査の開始にあたって、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が挨拶。
「この最終審査に残っているのは、1,925もの応募作品の中から選ばれた8つの論文です。実際にお会いすることができないのは大変残念ですが、オンラインでみなさんからの提案をお聞きするのを楽しみにしています。緊張しないで普段通りに話してください。」と激励しました。

［最終審査会　審査委員］

審査委員長

桑津 浩太郎　NRI研究理事

特別審査委員

池上 彰　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授
最相 葉月　ノンフィクションライター
梅野 修　共同通信社　常務理事

審査委員

此本 臣吾　NRI代表取締役会長兼社長
横山 賢次　NRI常務執行役員
桧原 猛　NRI執行役員
齊藤 義明　未来創発センター 2030年研究室長
八代 夕紀子　プラットフォームサービス開発部　グループマネージャ

最終審査会レポート

NRI学生小論文コンテスト2020
サステナブル未来予想図
～最適な社会の構築に向けて～

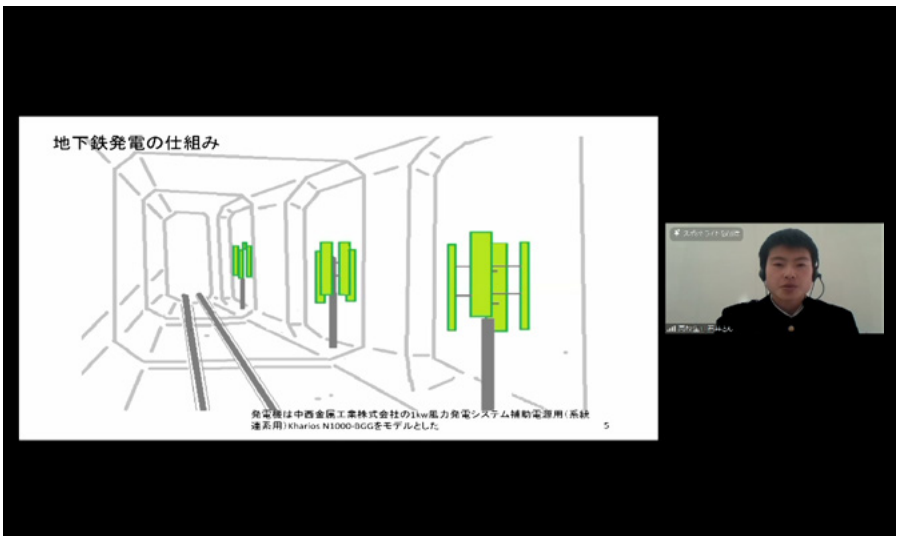
2020年12月18日に「NRI学生小論文コンテスト2020」の最終審査会が行われました。今回は新型コロナウイルスの感染対策として、オンラインによる開催となり、NRI東京本社の大会議室を拠点に、最終審査対象論文の執筆者をオンラインで結び、プレゼンテーションを行ってもらいました。その様子をレポートします。
＊プレゼンテーションは6分＋質疑応答3分で、氏名の五十音順に行いました。

高校生の部

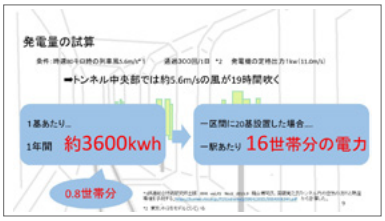
地下鉄風力発電 ～捨てられる列車風をエネルギーに～

石井 裕太　いしい ゆうた

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=4QV913_ldTw&feature=youtu.be



日常の光景に着想を得て、小型プロペラをトンネル内に設置し、地下鉄の列車風を利用した「地下鉄風力発電」によって駅の電力をまかなうというアイデアを提示。「捨てられている列車風を新たなエネルギー源として有効利用できれば、今あるエネルギーを無駄なく効率的に使うサステナブルな社会への新たな一歩になる」と訴えました。落ち着いた語り口で提案のメリットを考察し、発電量を試算して定量的に示している点も提案への納得感を高めました。



審査委員との質疑応答

Q――1日に19時間続けて電車が通るという前提で試算をされていますが、19時間というのはどこからきているのでしょうか。また、電車ではなくて、自動車のトンネルならどうかといったことは考えましたか。

A――東京メトロをモデルに考えて、始発から終電まで1日の運行時間が約19時間で、その間は風が吹いているというデータがあり、約4分に1回、電車が通過するという条件で考えました。自動車のトンネルについては考えませんでしたが、地下鉄は密閉空間で効率良く風が集められると思い、選びました。

Q――東京メトロは朝夕のラッシュ時は本数が多いですが、時間帯によっては大変少なくなります。その辺は考えましたか。

A――そこまで考慮せず、19時間を運行本数で割り、4分に1本電車が通るとしました。

Q――具体的に1駅あたりどのくらいの電力量が必要か調べましたか。このアイデアでそれをどの程度まかなえるものなのでしょうか。

A――1駅あたり必要な電力量は調べていないのですが、駅ごとの消費電力量に合わせて設置台数を変えれば、その駅に合わせた量を発電できると考えています。

いじめの増加について考える　～教育からの視点～

川本 洋輔　かわもと ようすけ

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=In_8HLouDPA&feature=youtu.be

増加するいじめには迅速な情報共有が重要であるとして、学校や家庭、友達との関係性を子供の声で可視化する日記アプリというアイデアを提示。気づきや他者への理解を育むことで子供たちの成長を支え、安心してコミュニケーションできる環境を作りたいと訴えました。
アプリの仕組みや機能を図解で分かりやすく表現。「生き生きと学び合える、いじめのない社会を実現していきたい」という言葉が、強く響きました。

審査委員との質疑応答

Q――このアイデアは、日記を書いている子供本人は、先生や親にも見られているということを知っているのですか。

A――はい。子供たちは親や先生が見ることを知っていて、その前提で日記を書きます。

Q――他の人が見ることが前提で、果たして日記に本当のことを書くかどうか疑問なのですが、その辺はどう考えていますか。

A――もし本当のことを書かなかったり嘘を書いてしまったりしていても、親や先生がその子供の表情や様子をよく見て、対処するようにするとよいと思います。このアプリは、子供が困っているというサインを出すことができるというだけでも、十分に機能を発揮できると考えています。

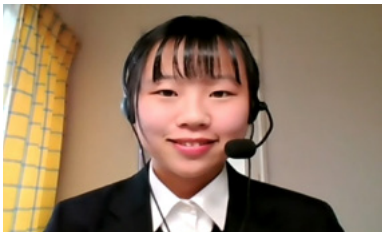
Q――もしクラスメイトに自分をいじめている人がいたとしたら、それでも日記に書けるでしょうか。どう思われますか。

A――厳しいところではありますが、日記を書いた人も見た人も匿名なので特定される可能性は低いと思います。ですから、本当に親や先生に相談したいときはこの日記に書けるといいですし、子供たちがこれによって成長していくといいと考えています。

「減災納税」で減災対策、そして自然災害による新たな貧困をなくす

佐藤 さくら　さとう さくら

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=SJ54Wk8VukQ&feature=youtu.be



自然災害による新たな貧困を生み出さないようにしたいとの思いから、ふるさと納税のしくみをもとに「減災納税」を創設して寄附金を減災対策に使い、返礼品にも災害対策に役立つものを送るというアイデアを提示。社会と国民の自然災害へのレジリエンス強化のために、持続可能な取り組みであると主張しました。
効果的に図や写真を使いながら、テンポ良く明瞭な語り口で「減災納税」の仕組みやデメリットへの解決策を説明し、減災対策の必要性を印象づけました。

審査委員との質疑応答

Q――ふるさと納税の仕組みをもとに考えたということですが、減災納税を行うのはどういう人だというイメージを持っていますか。

A――例えば実家が過疎地にあって、その自治体の財政状態が都市部に比べて悪く、高齢者が多いと、災害のときに親は助けてもらえるのかという不安が子供にあると思います。そういう場合に、親の住む自治体に減災納税をすることで安心できますし、自分も返礼品で災害への備えができるという、そういうイメージを持っています。

Q――減災納税では、地域格差を防ぐために都市部と地方で寄附額を分配するということですが、寄附額の分配の方法がよく分からなかったので、教えてください。

A――都市部と地方では人口も違うので、必要とする減災への寄附額も違ってくると思います。住民の数や高齢者の割合などを考慮して、財政格差が起きないように都市部と地方でバランスをとって分配していくと良いと思います。

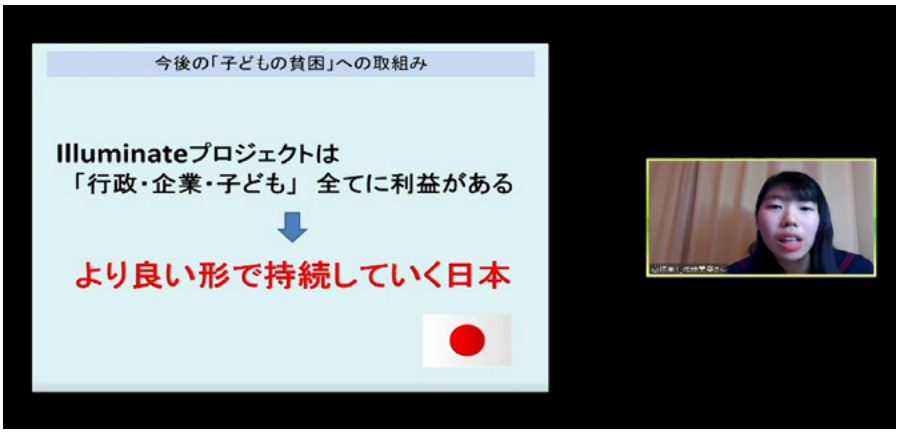
Q――都市部と地方で寄附額を分配するとなると、その地域独自の納税を呼び込むための知恵がなかなか出て来ないのではないかと思うのですが、その辺はどうお考えですか。

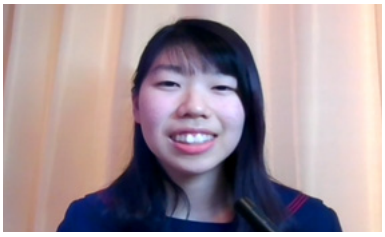
A――都市部と地方それぞれの特色を生かし、都市部は防災グッズを生産して返礼品にしたり、地方は特産品を缶詰にするなどして、都市部と地方が共同で参加することで返礼品の幅も広がると思います。

Illuminateプロジェクトで子供達の未来を照らす
～サステナブルジャパンの実現へ～

佐藤 美空　さとう みく

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=t0RDMx7Xp-o&feature=youtu.be





今日の最重要課題の一つである子供の貧困に対して、アプリ「Illuminate(イルミネイト)」を開発して「食」と「学び」で子供たちをサポートするプロジェクトを提案。「子供の健全な成長がこの国の未来につながることを国民全体で意識し、子供の貧困を救う仕組みを社会に取り込むことが必要だ」と主張しました。
取材やデータを踏まえてプロジェクトの可能性を説明し、「課題はあるが、あきらめずに取り組みたい」という言葉からは実現への強い想いが伝わりました。

審査委員との質疑応答

Q――プロジェクトを実施するとしたら、NGOの子ども食堂のような形がいいのか、それとも地域の行政が中心になって行うのがいいのか、その辺に対して考えはありますか。

A――理想としては、初めは政策として実施し、内閣府にイルミネイトプロジェクト推進室のようなものを置ければと思っています。支援サイドの協賛金が集まって収益が増えていったら、民間に事業を譲ってビジネスとして運営していくことを考えています。

Q――子供の貧困に興味を持ち、深く考えていきたいと思ったきっかけを教えてください。

A――海外に行った人が、貧しい国の子供たちが幸せそうだったと言っている記事を見て、「ここ日本で生きている自分が思う幸せと、貧しい国で考える幸せというのは根本的に違うのかな」と考えさせられ、そこから貧困問題についても関心が強まっていきました。

Q――仮に「子供は何でも無料にする」という政策があったとして、それと佐藤さんの考えるプロジェクトの違いがあるなら、どんなところだと思いますか。

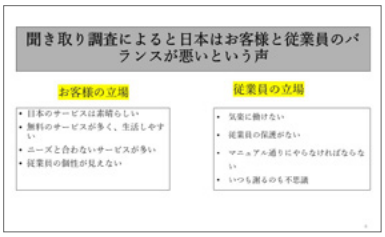
A――このプロジェクトは企業がCSRとして参加し、その協賛金を収益とすることを考えています。企業にとってはアピールポイントにもなり、子供は企業の支援を得て、自ら考えて生きていく力を育てていきます。国が税金で子供に物資や教育費をつぎ込むのではなく、経済をまわしていくという意味でも良いプロジェクトなのではないかと考えています。

大学生の部

持続可能な観光　～留学生から見た「おもてなし」～

ウィン ウィン ピュ
グエン ティ ビック　（共著）

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=VOdOoapBE3s&feature=youtu.be



日本の「おもてなし」に対して「サービス過剰ではないか」という問題意識を抱き、聞き取り調査を踏まえて「外国人からは画一的でやり過ぎだと思われている」と指摘。日本が世界に誇る観光資源「おもてなし」を持続可能にするには「相手のニーズに合わせる必要がある」と訴えました。
日本と海外の接客の違いを動画で表現するという工夫を凝らし、流暢な日本語で日本人のサービス観や「おもてなし」の本質を掘り下げるプレゼンから、留学生としての独自の視点が伝わりました。

審査委員との質疑応答

Q ──日本のおもてなしについて「相手のニーズに合わせるという、おもてなし本来のあり方に戻る必要がある」と提言されましたが、表現が抽象的なので、具体的にはどうすればいいと思うか、もう少し教えてください。

A ──本来、おもてなしというのは、お客様も従業員も互いに立場を考えるということだと思います。でも今はお客様を優先し過ぎて、お客様もそれを当然だと思い込んでしまって、配慮されないとクレームを言うような状態になっています。ですから、サービスの提供側が、もう少し「こういうサービスは普通ではない」ということをお客様に意識してもらえるようにしたほうがいいと思います。

Q ──お客さんに意識してもらえるようなサービスを考える、ということですか。

A ──はい、そうです。

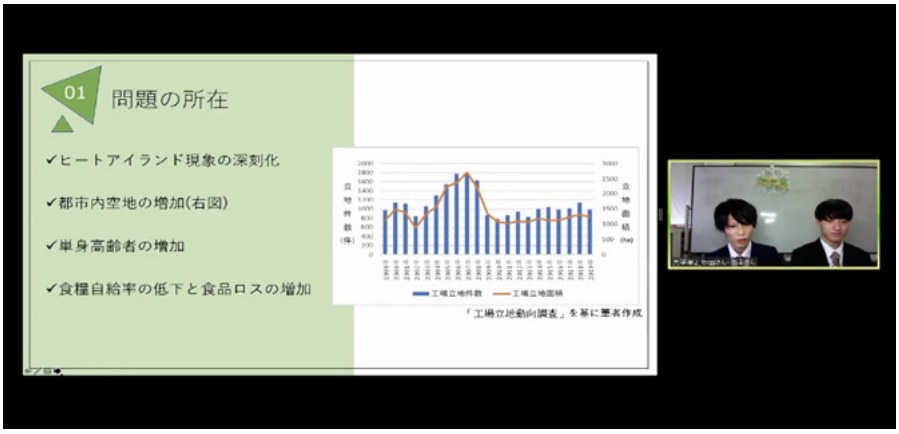
Q ──とても楽しいプレゼンで大変良かったです。鋭い指摘もあり、ぜひコンビニなどで提言していただきたいと思いました。ビデオが興味深くて、強烈な印象が残りました。

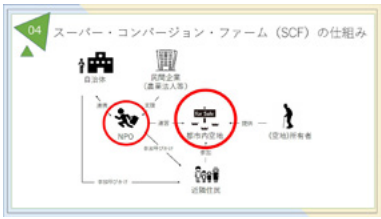
A ──ありがとうございました。

空き地転用農園
「スーパー・コンバージョン・ファーム（SCF）」の提案

坂田 匡弥　さかた まさや
池本 海大　いけもと かいと　（共著）

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=dwcNgMgrlOs&feature=youtu.be





ヒートアイランド現象の深刻化、都市内の大規模空き地の増加、食糧自給率の低下と食品ロス問題、高齢化などの問題を解決するため、都市内の空き地を農地に転用して市民農園として活用する「スーパー・コンバージョン・ファーム」を提案。
都市居住者へのアンケート調査をもとに、実現性や解決すべき課題を丁寧に分析することで、「実現に向けて取り組みを一歩ずつ進めることで、持続可能な最適な社会づくりに貢献できる」という訴えへの納得感を高めました。

審査委員との質疑応答

Q――ヒートアイランド現象や高齢化、フードロスなどの様々な課題を解決するためのアイデアとして面白い視点だと思いますが、ある地域を農業主体のコミュニティにした場合に、住民の多様性が失われないかという点が気になります。コミュニティというのは、やはり老若男女がいるからこそ活性化するのだと思うのですが、そういう懸念を乗り越えるための考えは何かありますか。

A――SCFの参加者としては、農業だけではなく環境問題に関心のある人たちも想定しています。SCFの実施によって、農業だけでなく環境問題に関心を持っている人たちなど、様々な人が増えることを期待しています。

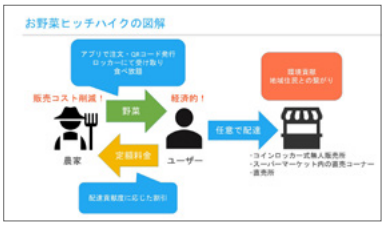
Q――遊休地の活用策として、都市部にはよく市民農園というものがありますが、今回のこの構想と市民農園は、どう違うのでしょうか。

A――この論文を書いていく中で学んだことなのですが、市民農園は自治体や地方公共団体が保有・管理している割合が非常に多いようです。SCFは自治体ではなく、NPO法人が土地の所有者から土地を借り上げて運営することを想定しています。ですから、都市の中の空き地を、より幅広く有効活用できるのではないか、と考えています。

お野菜ヒッチハイクプロジェクト
～野菜の廃棄ゼロを目指した新しい直売のカタチ～

丹野 円　たんの まどか
渡辺 結衣子　わたなべ ゆいこ　（共著）

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=q7CGal272DU&feature=youtu.be



価格調整のために野菜が農家で廃棄される「産地廃棄」に着目し、ITを活用した販売、コインロッカー方式の無人直売所、地域の消費者が協力して輸送を担うという新しいプロジェクトを提案。「もったいないという当たり前の感情をサステナブル意識につなげたい」と訴えました。
写真や図を使って、発案のきっかけや具体的な仕組みをはつらつとプレゼン。プロジェクトへの想いを丁寧に説明し、実現への期待感を高めました。

審査委員との質疑応答

Q ──とても熱意を感じるプレゼンで、面白いアイデアでした。配送する人には貢献度による割引があるということですが、例えば実施主体としては、どういったところを考えていますか。

A ──このサービスの売り込み先としては、現在、野菜の個人宅配サービスを行っている会社などを想定しています。

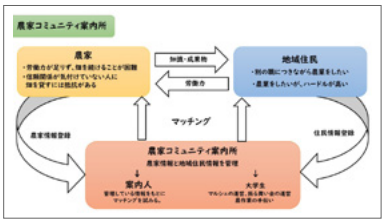
Q ──産地廃棄が生じるひとつの要因として、やはり供給が多くなりすぎることで価格破壊が起きるということがあると思います。野菜の旬を考えた場合、特定の時期に特定の野菜が膨大な量とれてしまうわけですが、それをこのシステムのヒッチハイク的な配送で処理できるでしょうか。どういう解決策を考えていますか。

A ──やはり、このシステムだけでまかないきれるとは考えていません。「お野菜ヒッチハイクプロジェクト」の目標は、消費者に産地廃棄を減らすことに協力してもらい、その体験を通してサステナブル意識を育ててもらうということです。より魅力的なサービスにして、ユーザーを増やすことで少しでも対応できたらと考えています。

人と環境（自然・歴史的文化）の繋がりを維持することから生まれる 新たな農業との関わり方

三輪 泰生　たみわ たいき

プレゼン動画はこちら　https://www.youtube.com/watch?v=d0piMNSXEqs&feature=youtu.be



労働力不足と耕作放棄地の増加という現実に対して、農地と人の繋がりを維持し、新たな農作物を生産する若年層を農業に引き込むための「農家コミュニティ案内所」、および持続的に農業を行う人材を育成するための農業プロセスを提案。農家中心の地域コミュニティを形成して、地域の歴史や文化を継承しながら農地を守ることの重要性を訴えました。
農作物を育て、人と交わり、地域を活性化させようとする実践的な活動から、コミュニティに支えられる農業を作っていきたいという熱い想いが伝わりました。

審査委員との質疑応答

Q――農作業に参加する学生が次第に減っていったとありましたが、やはり農業は想像以上に大変だということがあったのだと思います。しかも学生さんはアルバイトなどでも忙しく、4年間で卒業していくので、何らかのメリットがないと持続的に参加するのは難しいと思うのですが、そういった持続性の面はどのように考えていますか。

A――確かに、学生にもメリットがないと農業を続けるのは苦しい面があると常々感じています。私の場合は「自分は農業をすることでコミュニティに支えられている」と実感することがあり、それが農業をする理由になっています。農家コミュニティ案内所では、学生は案内人としてコミュニティに入っていき、コミュニティの必要性を感じることできると思いますので、それがメリットになるのではないかと考えています。

Q――今、日本の農業は人手不足の問題が深刻で、40万人の外国人労働者に支えられながらも、この1年で10万人程度の農業就労者が減っています。このような大きな規模の問題に対して、三輪さんの考える活動はどのような意味を持つと思いますか。

A――5ヘクタール未満の農家数が大きく減少していることに対して、国の政策として農地の大規模集約化によって人手不足に対応していこうとしています。この提案は、そこに行きつけない、労働力不足で耕作放棄地が増えてしまっている小規模農家を地域住民でサポートするという意味で考えました。

最終審査結果および評価のポイント

「サステナブル未来予想図 ～最適な社会の構築に向けて～」をテーマに設定した「NRI学生小論文コンテスト2020」は、大学生の部4作品、高校生の部4作品、計8作品が最終審査会に進みました。
2020年12月18日の最終審査会において、筆者によるプレゼンテーションをオンラインで実施し、厳正な審査を経て、以下のとおり受賞論文が決定しました。

大学生の部

大賞

お野菜ヒッチハイクプロジェクト
～野菜の廃棄ゼロを目指した新しい直売のカタチ～

丹野 円
渡辺 結衣子　（共著）

評価のポイント

価格調整のために野菜が市場に出回る前に農家で廃棄される「産地廃棄」に着目し、ITを活用した販売、コインロッカー方式の無人直売所、地域の消費者が協力して輸送を担うという新しいプロジェクトを提案。食品ロスの中でも、特に産地廃棄に注目したその着眼点や、問題の本質を流通コストに踏み込んで考察している点が高く評価された。

野菜の定額サービス（サブスクリプション）や輸送への貢献度に応じた割引などの新しいアプローチを入れながらプロジェクトを組み立てており、ビジネスモデルの原案としても興味深い。実現への期待感を抱かせる提案であった。

優秀賞

空き地転用農園
「スーパー・コンバージョン・ファーム（SCF）」の提案

坂田 匡弥
池本 海大　（共著）

評価のポイント

ヒートアイランド現象の深刻化、都市内の大規模空き地の増加、食糧自給率の低下と食品ロスの問題、高齢化といった様々な問題を解決するため、空き地を農地に転用して市民農園として活用する「スーパー・コンバージョン・ファーム（SCF）」を提案。

現代日本の都市における問題を一挙に解決しようとする試みであり、都市に住む人々の生きがい創出にもつながる点を高く評価した。「最適な社会の構築に向けて」というテーマにも合致している。アンケート調査で実現性を検証している点や、土地所有者や周辺住民の合意など超えるべき課題を明確にしている点も説得力を高めている。

最終審査結果および評価のポイント

大学生の部

特別審査委員賞

人と環境（自然・歴史的文化）の繋がりを維持することから生まれる新たな農業との関わり方

三輪 泰生

評価のポイント

人間の生活を支える農作物の生産を維持するためには「農家中心の地域コミュニティ」の形成が必要だという思いから、自ら農地を借りて農作物を育て、人と交わり、農業に関わる人を増やして地域を活性化させようとした実践的な試みを行っている。

耕作放棄地の増加や農家の人々の思いの深さなどの現実を踏まえた上での、農業に地域住民や学生を結びつける「農家コミュニティ案内所」の提案には、現場を知っていることから来るリアルさや力強さが感じられ、惹きつけられる。地域の歴史や文化を継承しながら農業を守るシステムを構築しようとする志と行動力も、高く評価したい。

留学生特別賞

持続可能な観光 ～留学生から見た「おもてなし」～

ウィン ウィン ピュ
グエン ティ ビック　（共著）

評価のポイント

旅館でのインターンを通じて「日本のサービスは過剰ではないか」という思いを抱き、外国人の同僚や留学生への聞き取り調査を踏まえて、グローバル化が進む中で日本のあるべき「おもてなし」を掘り下げて考察している。

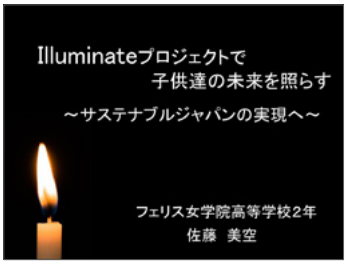
日本人が誇りに思っている「おもてなし」を、実は外国人からはサービス過剰で画一的だと見られていると指摘し、もっと相手のニーズに合わせるべきだと問題提起する、その視点を高く評価した。優れた日本語の文章力で日本人のサービス観を分析しており、次々と読み進めたくなる面白さがある。

高校生の部

大賞

Illuminateプロジェクトで子供達の未来を照らす
～サステナブルジャパンの実現へ～

佐藤 美空



評価のポイント

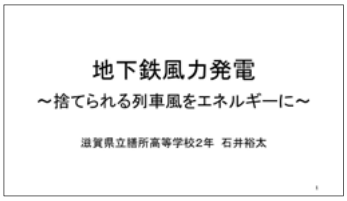
近年の最重要課題の一つである子供の貧困に対して、アプリ「Illuminate（イルミネイト）」を開発して「食」と「学び」で子供たちをサポートするプロジェクトを提案。子ども食堂への取材や調査を踏まえた丁寧な問題分析に、子供の貧困に対する真摯な姿勢が感じられる。

子供の貧困は負の連鎖を引き起こし、国を揺るがす問題にもなるという大きな捉え方で発想した点や、与えるだけでなくて成長を促すという視点も高く評価した。アプリには文化教育面の豊かさや、子供の見守り、親との連携につながる可能性や大きなパワーを感じられる。論文としての完成度も高い。

優秀賞

地下鉄風力発電 **～捨てられる列車風をエネルギーに～**

石井 裕太



評価のポイント

クリーンエネルギーとして注目されながらも、発電の不安定さ、騒音、環境破壊など課題も多い風力発電に対して、地下鉄の列車風を利用した「地下鉄風力発電」で地下鉄の駅の消費電力をまかなうというアイデアを提示。日常の光景から得た着想に虚を突かれるとともに、その独自性を高く評価した。

日常に問題意識を持って自ら考える姿勢や、問題解決に向けて論理的に追及する姿勢も優れている。メリット、デメリットの分析が鮮やかで、電力を試算して定量的に示している点も説得力を高めている。読み手に実現への期待感を強く抱かせる提案であった。

最終審査結果および評価のポイント

高校生の部

優秀賞

「減災納税」で減災対策、
そして自然災害による新たな貧困をなくす

佐藤 さくら

評価のポイント

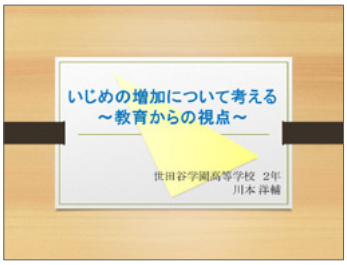
予測される南海トラフ巨大地震や繰り返し起こる豪雨災害など、自然災害へのレジリエンス強化が求められるのに対し、「減災納税」によって寄附金を減災対策に使い、返礼品にも災害対策に役立つものを送るというアイデアを提案。

国民自身と社会のレジリエンスのバランスに着目し、その解決方法に税という切り口を持ってきた点や、論文としの完成度の高さが評価された。ふるさと納税の経験を踏まえれば実現可能性が感じられる。減災納税としての魅力をいかに引き出すかについて想像もかきたてられ、地場企業との返礼品開発などの発展性も期待できる。

特別審査委員賞

いじめの増加について考える
～教育からの視点～

川本 洋輔



評価のポイント

増加傾向にあるいじめには早期発見が有効な手立てとされるのに対して、日記アプリによって異変を察知し、子供たちをフォローしようとするアイデアを提示。学校や家庭、友達との関係性を子供の声で可視化する日記アプリという発想や、カウンセラーが危険ワードをチェックするなどの具体的機能に独自性がある。

いじめから逃れるための消極的なアプリではなく、子供たちに気づきや他者への理解を育むことを念頭に考案されている点も、評価された。昨今いじめの現場はSNSに移行していることを逆手にとり、ある意味で学校生活のお守りになる可能性も感じられた。

最終審査を終えて

審査委員長
桑津 浩太郎　NRI研究理事

今回は、昨年に続いて「サステナブル未来予想図」というテーマを設定しました。「サステナビリティ」は社会全体に関わる重厚なテーマであるため、斬新な構想を描きにくく、地に足の着いた提案にならざるを得ないという難しさもあったと思います。

最終審査に残った論文の中には、自身の課題意識に基づいて実際に行動する中から解決への突破口を見い出し、独自のアイデアを提示しているものも見られ、これこそ若い人だからできることであり、社会課題の解決のために非常に重要なアプローチであると改めて感じさせられました。

みなさんには、今回の受賞をゴールではなく、ある意味でスタートと捉えていただき、今後もそれぞれの課題意識を深めながら進んでいってほしいと願っています。

特別審査委員
池上 彰 さん　ジャーナリスト、名城大学教授、東京工業大学特命教授

例年の最終審査会では、目の前でプレゼンテーションを行っているみなさんの様子を、息遣いまで含めて感じることができるのですが、今回はコロナの影響でそれが叶わず、残念でした。発表者のみなさんも、パソコン画面に向かってのプレゼンテーションはやりにくいところもあったのではないかと思いますが、審査する側からすると、改めてじっくりと提案内容に集中して聞くことができたという思いがあります。

コロナ禍で大変な状況の中、しかしこういうときだからこそサステナビリティというものがどういうことなのかということをそれぞれの立場から考えて、論文にまとめられたみなさん。論文は論文として優れており、最終審査でのみなさんのプレゼンテーションもそれぞれ工夫されて優れたものでした。この度は、誠におめでとうございました。

特別審査委員
最相 葉月 さん　ノンフィクションライター

全体的に地に足の着いた提案が多く、みなさんが現実の危機を強く認識していることがよく分かりました。中には、自らが行動の主体となって体を動かして課題に取り組んでいる論文もあり、現実の社会課題が困難である中にも希望が感じられました。やはり人間は自然の一部であり、そこを外して未来はないことを痛感しました。さらに、それを自らの手で作っていこうというみなさんの主体性と切実さ、問題意識の高さを感じることもできました。

また、今回のコンテストでは留学生特別賞が新設され、久しぶりに留学生からの論文の応募があったことは大変喜ばしいことでした。

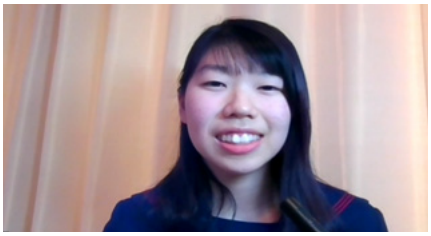
受賞されたみなさん、本当におめでとうございました。

表彰式

2020年12月18日、「NRI学生小論文コンテスト2020」の最終審査会に続いて、オンラインで表彰式が行われました。
表彰式では、NRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾が、11名の受賞者（大学生の部7名、高校生の部４名）に表彰状と副賞を授与。
開催拠点となったNRI東京本社大会議室には、NRIの審査員や事務局スタッフなどの大きな拍手が響いていました。
受賞者はオンライン上で、晴れやかな表情を見せてくれました。

大学生の部 大賞受賞の
丹野 円さん（左）と渡辺 結衣子さん

大学生の部 留学生特別賞受賞の
ウィン ウィン ピュさん（左）と
グエン ティ ビックさん



高校生の部 大賞受賞の
佐藤 美空さん

受賞者一人ひとりに向け表彰状を読み上げるNRI代表取締役会長兼社長の此本臣吾

受賞者それぞれと、表彰状を手にした此本がオンラインで記念撮影

閉会挨拶をする NRI 常務執行役員の横山賢次

オンラインでつながって、最後にみんなで記念撮影。来年はリアルで開催できますように！

受賞者の言葉

大学生の部　大賞

お野菜ヒッチハイクプロジェクト ～野菜の廃棄ゼロを目指した新しい直売のカタチ～

丹野 円 さん　東北学院大学 経済学部経済学科 2年
渡辺 結衣子 さん　東北学院大学 経済学部経済学科 2年　（共著）

左：丹野円さん　右：渡辺結衣子さん

このような素敵な賞を受賞させていただき、本当にありがとうございます。プレゼンテーションでは6分以内におさめるためにたくさん言葉を削る必要があり、苦戦したのですが、そんな中で、2人で考えれば考えるほど、このプロジェクトの可能性に気づくことができました。

例えば、コミュニティを魅力的にするアイデアとして、規格外品を集めてそれをみんなで消費するパーティとして焼き芋大会をしたり、コミュニティを活用して第1次産業の担い手不足をアルバイトで対応したりと、いろいろな可能性が考えられます。質疑応答でそれをうまく答えられずに悔しい思いをしたのですが、今は本当に光栄な気持ちでいっぱいです。

大学生の部　留学生特別賞

持続可能な観光 ～留学生から見た「おもてなし」～

ウィン ウィン ピュ さん　高崎経済大学 地域政策学部観光政策学科3年
グエン ティ ビック さん　高崎経済大学 地域政策学部観光政策学科3年　（共著）

留学生特別賞を受賞させていただき、本当にありがとうございます。野村総合研究所のみなさん、特別審査委員の池上さん、最相さんにも、お礼を申し上げたいと思います。また、この論文を書くためにいろいろとサポートしてくださった大学の指導教授や、インターンシップをしたホテルのみなさんにも、感謝しています。

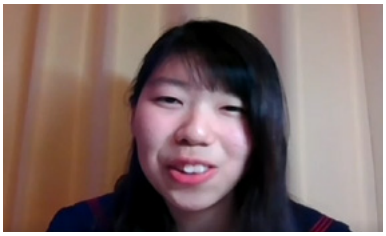
この論文は私たち2人だけの思いではなく、外国人留学生みんなの思いを聞いて書いたものです。少しでも私たち留学生や外国人の思いが日本の方に伝わればいいなと思っています。

左：ウィン ウィン ピュ さん
右：グエン ティ ビック さん

高校生の部　大賞

Illuminateプロジェクトで子供達の未来を照らす ～サステナブルジャパンの実現へ～

佐藤 美空 さん　フェリス女学院高等学校 2年



このような大きな賞をいただき本当に驚いていますが、大変光栄です。

プレゼンテーションではとても緊張し、質疑応答で言いたいことが言えず悔しい気持ちがありましたが、こうして評価してくださったことを機に、今後も子供の貧困について学びを深めていこうと心を新たにしています。

私の考えたIlluminateプロジェクトは、イギリスのビッグイシューやバングラデシュのグラミン銀行のような、貧困層のための民間のソーシャルビジネスが目標です。そのためにはネットワーク構築の勉強が必要だと思うので、これからのデジタル変革についていけるように大学で学びたいと考えています。協力してくださった子ども食堂にも、食材の差し入れを持ってこの受賞を報告しに行きたいと思います。

株式会社 野村総合研究所

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ
Tel.03-5533-2111